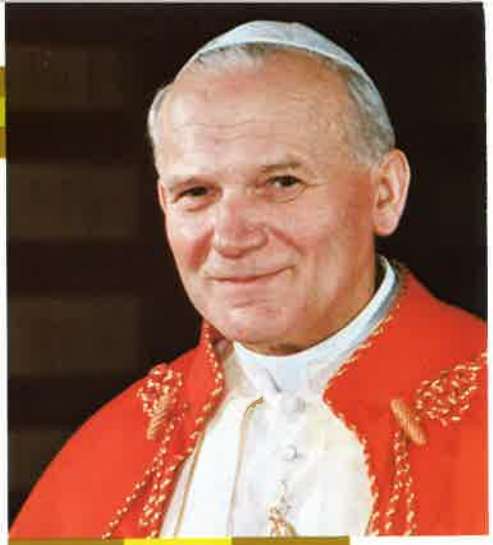
10 昭和63年(1988年)10月10日 教皇様の聲 (昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
OCTOBER, 1988 毎月10日発行 第102号



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

教会と共に生きる

〈教会の感覚〉を保って生きるとは、何よりもまず、イエズス・キリストが啓示し教会が宣言した神を信じることを意味します。主がお与えになった信仰の賜、皆さんの祖先が時には容易ならぬ困難のさなかにも称賛に値する雅量で保ち伝えてきた信仰の賜を、誇りとするのは当然でしょう。信仰は決して傷つけてはならぬもの、ましてや失ったり壊したりしてはならない、貴重な宝物です。生命をかけても、注意深く守ってください。今日では数々の危険や誘惑が存在するようです。いや事実存在し、忍びこんで来つつあります。ある種のイデオロギーやマスコミが宣伝する様々な行動形態などのことです。たとえ反キリスト教でなくても、存在という重大な問題や、キリスト教の人生観と歴史観に対して無関心でいる態度が吹き込まれています。

知性と心を巧妙に毒するこの絶え間ない脅威に対しては解毒剤が必要です。個人的にも共同体としても、キリスト教のメッセージをその表現と要求のあらゆる面から深めねばなりません。各年齢層にわたる信者への不断のカテケージスを実現させなければならないのです。

ナザレトのイエズス、神の御子、主、人類の救い主であり贖い主である御方を信じ、弟子としてつき従ってゆくために、まず聖書を常に黙想して、イエズスを知ることが必要です。福音書を熟読玩味しましょう。そこではイエズスが一人称でお話しになり、その御人格、メッセージ、要請、奇跡、御受難と死と復活、すなわち〈御自身の秘義〉を私たちに示してくださいます。

私たちが目にする通り、文化的にも社会的にも変化の甚だしい時であるだけに、キリストの福音を全き姿で現代社会に宣言することができるよう、真の正しい再福音化に着手しなければなりますまい。

〈教会の感覚〉を持って生きるとは、教会を知り、愛し、〈教会と共に感じる〉ことを意味します。「キリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具」(『教会憲章』1)である教会を、知り、愛することです。キリストが唯一の必要な門であり、キリストを良き牧者としていただく羊の群である(ヨハネ10・1〜10)教会。キリストは真のぶどうの木で、私たちはその枝です。教会は神のぶどう園(ヨハネ15・1〜5)であり、神は枝である私たちに多くの実を結ばせてくださいます。キリストの肢体である教会の中で、キリストの生命は信仰の秘跡を通して信者の内に広がってゆきます。この新しい神の民、「キリストを頭といただいているこの民は、神の子らとしての品位と自由をそなえ、かれらの心の中には、あたかも神殿の中におけるように、聖霊が住んでいる。この民は、キリスト自身がわれわれを愛したように愛せよとの新しいおきてを律法として持っている。(ヨハネ13・34参照)この民は神の国を目的としている。」(『教会憲章』9) このような教会を、知り、愛するのです。

ノックの聖母
—アイルランド— 霊的巡礼⑨

本日は偉大な使徒聖パトリックの国、アイルランドのノックにあるマリア聖所を訪ねたいと思います。

古いキリスト教の伝統をもつあの愛する国への司牧旅行中、一九七九年九月三十日、神は私にアイルランド人の敬愛する聖所を訪ねる機会を与えてくださいました。私の訪問はアイルランド西部にある村ノックのつつましい教会の南側の壁に、アイルランドの女王たる聖母が聖ヨセフ、聖ヨハネと共に現われたことを祝う百周年の祝典と偶然にも重なりました。聖母が出現した一八七九年八月二十一日以来、ノックはアイルランド人の深い聖母信心の巡礼地・拠り所となったのです。

ノックでの聖母の出現は、二つの点で私たちの興味を引きます。その村の教会を通りかかり最初に発見した人人が、あたりに散在する家々の人たちを呼び集める間、出現し続けておられたことです。大人や子供、十八人あまりがその証人となりました。

第二は、この出来事の間言葉は全くなかったということです。聖母は平和の元后として金の冠を頭に戴き祈る姿勢をして両手を上げておられました。マリアと二人の聖人は、その仕草を通して祈り、聖書についての黙想、私たちの贖いのために命を奪われた羊、つまりキリストの助けによる神との和解を呼びかけています。ノックでは一九七六年、増え続ける巡礼者のために新しい教会が献堂されました。ノックへの巡礼の特徴は、病人の祝福の他、祈り、特にロザリオの祈り、そして赦しの秘跡に与ることだったのです。

いま私の話に耳を傾けておられる全ての人々に、愛するアイルランドのため、共に平和の元后なるノックの聖母に祈るようお願いします。アイルランドの人々が、その歴史に深く浸透したキリスト教信仰を常に守ってゆくことができますように。聖パトリックの地において、二十年もの間死と苦しみをもたらしているカトリックとプロテスタントとの政治的暴動やテロが終結するよう、私と共に祈ってください。

ノックの聖所を訪ねた折、聖母に祈った言葉を今一度繰り返します。

「アイルランドの女王よ、天と地の教会の母なる聖母マリア、神の母よ、アイルランドがその心の伝統とキリスト教の遺産を忠実に守ることができますように。キリストの光を諸国にもたらすという歴史的な使命に、アイルランドが答えられるよう力をお貸しください。(…)あなたはこれまでアイルランドにおられ、当地で深く愛されています。そのアイルランドを、母なるあなたの御加護に委ねます。いかなる時もこの国があなたとあなたの御子に忠実でいられますように。」

(八八・三・十三)

知恵と謙遜との融和

――使徒たちに託された永遠の遺産

「天地の主なる父よ、あなたに感謝致します。」(マテオ11・25)

キリストが「聖霊によって喜びに身をふるわせ」(ルカ10・21参照)て語ったと福音史家の伝える感謝の言葉が、新しい学年の始めにあたり、私たちへの励ましとなりますように。

今日私たちはここに集まっています。ローマの教会の司教として、私はこのユーカリスチアの集まりが特に必要であると感じ、開会式にあたって特別な喜びを覚えています。

教会大学の一年が、「父よ、あなたに感謝いたします……」というキリストの言葉と共に始まりますように。

本日の典礼の言葉は、知恵と理解と知識を賞賛しています。この賞賛はシラの子の書に現われていて、神からの大いなる恩寵でもあるこれらの才能を備えた人を示しています。この書の著者は次のように書いています。「人はみな、彼の知恵をたたえ、その記憶は、人の心から去らない。(…)民はその知恵を語り、集会はその誉れをたたえる。」(シラの書39・9～10)

私たちすべてがこの祈りの言葉によって、理解、知識、学問、知攀の大いなるわざに生き生きと参加するよう呼びかけられているのです。教授、学生、教師、弟子のすべてがそれぞれに適した方法でこの仕事に携わるよう求められています。そしてこの呼びかけは毎年、学年の始めに改めて行なわれるのです。

天地の主なる父に感謝するイエズスは、賢い人、知恵ある人には隠され、小さな人々に現わされていることについても同時に語っておられます。(マテオ11・25参照)

使徒パウロは同様のことを一歩進めて書き送っています。「神は知恵者を辱しめるために世の愚かな者を選ばれた。」(コリント①1・27)

ですから、新しい学年の始まりにあたって私たちは独特の逆説に直面しているのです。私たちは人間の知性、知識、学問、知恵の大きな企てへの参加を要請されていると同時に、この企てが単なる人間的な次元にとどまらないよう忠告されています。福音書にある「小さな人々」の道を歩むよう求められているのです。使徒パウロの言葉によると、この世における「愚かな」ことこそが主に向かう道、神の選びと同じ意味をもつようになります。

学問を修める人々は、司祭などの聖職への準備期間と同様に、この大きな逆説に対して変わらぬ忠実をもって立ち向かわなければなりません。実のところ、大きな矛盾はないのです。人が知性によって知り得るすべての事と、それを超えて神が御言葉を通じて人に語りたいとお望みになる事柄との間には、何の矛盾もありません。神は聖心のままに、そのように語ろうと考えておられるのです。(マテオ11・26参照)

キリストは仰せになりました。「すべてのものは、父から私にまかされました。子が何者かを知っているのは父のほかにはなく、父が何者かを知っているのは、子と子が示しを与えた人のほかにはありません。」(マテオ11・27)　このように私たちは、知性の努力、学問の実りとしての知識、また私たち自身を神の秘義に開放することによって得られる知識のもとへと召されているのです。このような知識こそが知恵の達成です。

本日の祈りの中には、これまで述べてきたものとある意味で平行線上にあるもう一つの呼びかけが含まれています。詩篇作者はこう語っています。「私は心をあげてあなたを求める、主のおきてから私をはずしたもうなと。私はあなたに背いて罪を犯さぬように、心の中にみことばを保つ。(…)私はあなたの証の道を、どんな富にもまさって喜ぶ。」(詩篇119(118)・10～11、14)

新しい学年の戸口に立ち、知性と心、知性と意志によって全人格的に、この大きな企てに取り組まなければなりません。仕事は指導と教育の両方にまたがります。学問と修徳の努力なのです。この両面の有機的なバランスを保つべきです。常に統合をはからなければなりません。

このような統合は難かしくもありますが、魅力もあります。イエズスが御自身の「くびき」について語られた次の言葉をあてはめることができます。「私は心の柔和なへりくだった者であるから、くびきをとって私に習え。そうすれば霊魂は休む。私のくびきは快く、私の荷は軽い。」(マテオ11・29～30)

いかに多くのことが、この言葉で語られているのでしょう！　私たちが歩むよう勧められている道について、何と深い言葉で語られていることでしょう！　キリストの弟子が受けた永遠の遺産とは知恵と謙遜の融和であり、キリストは「私に習え」と仰せになったのです。

学年の開始日にあたり、私たちはお互いに何を願いあうべきなのでしょうか。世界各地のさまざまな教会の大学で同じ仕事に携わる人々に何を願うべきでしょうか。

「私に習え」という言葉にすべてが含まれていると私は思います。

今始まろうとしているこの一年間、私たちがキリストのさらに良き弟子となれますように。教える者、学ぶ者全員を成長させる一年となりますように。一人一人すべての者を。

イエズスは「みな私のもとに来なさい」と言われます。私たちも立ち上がり、歩きだしましょう！

ローマで、そして世界中で始まるこの新しい学年を、私は特別な意味で、教会の敬う上智の座である聖母に委ねます。

(一九八八年五月)

福音書に見るイエズスの人性

キリストシリーズ ⑮

1　イエズス・キリストは真の人です。このテーマについて前回の考察を続けたいと思います。これは私たちの信仰の土台をなす真理です。使徒や弟子たちの証言によって確証されたキリスト御自身の御言葉に基づく信仰です。教会の教えの中で世代から世代へと伝えられてきました。「私たちは信じます……真の神、真の人を。…幻ではなく、唯一の神の御一人子を。」(第二リヨン公会議DS『カトリック教会公文書集』852)

最近、この教えが第二バティカン公会議で想起され、肉体をとり、私たちと同じ人間となり、人としての生活を始められたというみことばの新たな関係が強調されました。「御託身(受肉)によって神の御子はある意味で人間一人ひとりと結ばれた。御子は人間の手で働き、人間の知力で考え、人間の意志で行動し、人間の心で愛された。処女マリアより生まれた御子は、罪を除いてすべてにおいて私たちと同じになった。」(『現代世界憲章』22)

2　前回は、キリストが私たちに「似た」御方であることを述べましたが、それはキリストが真の

説教・講話・書簡等の抄訳

人間であらせられたことからわかることでした。「みことばは肉体となられた」。この（サルクス sarx）肉体という語は、（サルキコス sarkikos）肉体をもったものとして人間を表わしています。みことばは女から生まれて存在を始めました。（ガラツィア4・4参照）肉体をもつナザレトのイエズスは、他の人間と同様に苦しみ、飢え、渇きを覚えられました。その御体は傷つくこともあり、苦しみを伴い、肉体的痛みを感じられるものでした。「十字架につけられ、死して葬られたまえり」。苦難をお受けになったのも、十字架上にて死去されたのもこの肉体においてでした。

先に引用した公会議のテキストはイエズスについて次のように結んでいます。「イエズス・キリストは人間の手をもってお働きになり、人間の知力で考え、人間の意志で行ない、そして人間の心で愛された」（『現代世界憲章』22）

イエズスの心理

3 今日は、イエズスの心理の核心にせまる今述べた点に注目してみましょう。イエズスは、人間のもつ喜び、悲しみ、怒り、驚き、愛といった感情を覚えられました。例えば次のように記されています。

「イエズスは聖霊によって喜びに身をふるわせられた」（ルカ10・21）

エルサレムを眺めて泣かれたことも記されています。「町に近づくと、それをながめて泣かれたイエズスは『ああ、エルサレム、もしこの日に平和をもたらすはずのものをおまえが知っていたら…』…と言われた」（ルカ19・41～42）そしてまた、友ラザロの死にも泣かれました。「イエズスは、彼女（マリア）がすすり泣き、ともに来たユダヤ人たちも泣いているのを見て感動し、心を騒がせられ、『彼をどこに納めたのか』と言われた。マリアは『主よ、来てごらんください』と答えた。イエズスは涙を流された」（ヨハネ11・33～35）

4 ゲッセマニの園でのイエズスの悲しみは特に激しい感情でした。「ペトロ、ヤコボ、ヨハネを連れて行かれた。イエズスは激しい恐れと悩みに打ち沈み、『私の魂は死なんばかりに悲しむ』と言われた」（マルコ14・33～34、マテオ26・27参照）ルカの福音書には「イエズスはもだえて、いよいよ切に祈られたので、御汗は血のしずくのように地に落ちた」（ルカ22・44）とあります。ここでもイエズスの真の人性を証明する精神的、肉体的状態が表われています。

5 イエズスの怒りについても記されています。安息日に片手の動かぬ人を癒された時、まずイエズスは人々に尋ねられました。「『安息日に善を行なうのと悪を行なうのと……ゆるされているのはどちらか』と言われた。彼らはだまっていた。イエズスは一同を怒りのまなざしで見回し、その心のかたくなさを悲しみつつ、手なえの人に『手を伸ばせ』と言われた。その人が手を伸ばすと、手は治った」（マルコ3・5）

神殿から売る人、買う人を追い出された場面においても同様でした。「イエズスは、神殿内から売る人、買う人をすべて追い出し、両替屋の机やはと売りの腰掛けを倒し、『（私の家は祈りの家といわれる）と書かれているのに、それを盗人の巣にするのか』と言われた」（マテオ21・12～13、マルコ11・15）

6 イエズスが「驚かれた」ことも記されています。「イエズスは彼らの不信仰に驚かれた」（マルコ6・6）感嘆の念に心動かされることもありました。「ゆりの花を見よ。……ソロモンさえその栄華のきわみにも、ゆりの一つほどにも装わなかった」（ルカ12・27）カナンの女の信仰に感心されて、「ああ女よ、あなたの信仰は深い」（マテオ15・28）と言われました。

7 中でもとりわけ、イエズスが愛を実行された御方であることを福音書は記しています。天の国に入るためには何をすべきかを尋ねて来た若者への話の場面で、「イエズスは彼をじっと見つめ慈しまれた」（マルコ10・21）とあります。福音史家ヨハネは、「イエズスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」（ヨハネ11・5）と記し、自分を「イエズスの愛しておられた弟子の一人」（ヨハネ13・23）と呼んでいます。

イエズスは子供を愛されました。「イエズスに触れてもらおうとして人々は幼い子を連れてきた……イエズスは彼らを招き、手を置いて祝福された」（マルコ10・13～16）愛の掟を宣言なさる時、イエズスは御自ら実行された愛に言及して「私が愛したようにあなたたちが互いに愛し合うこと、これが私のおきてである」（ヨハネ15・12）と仰せられました。

8 キリストの御受難、特に十字架上の苦悩は愛の絶頂とも言えるでしょう。その愛をもってイエズスは、「この世にいるご自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された」（ヨハネ13・1）のです。「友人のために命を与える以上の大きな愛はない」（ヨハネ15・13）しかしそれは、この世の生活で味わわれた放棄と悲しみのどん底でもあったのです。「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ……私の神よ、私の神よ、なぜ私を見捨てられたのか」（マルコ15・34）これは、放棄された者の状態を鋭く描く表現として永遠に残るでしょう。それはイエズスが詩篇22・2から取った言葉で、神による一瞬の放棄に対する神秘的感情を伴った、魂と肉体の極度の苦しみを表わしています。御受難全体を通して最も激しい苦しみの時でした。

9 フィリッピ人への手紙に記されているように（2・7参照）イエズスは奴隷の姿をとり、人間に似たものとなられました。ヘブライ人への手紙の中で「将来の恵みの大司祭」（9・11）として記され、「私たちの大司祭は弱さに同情されぬ御方ではなく罪を除いてすべてを私たちと同様に味わわれた御方」（ヘブライ4・15参照）であることが確認されています。パウロが「神は罪を知らなかった御方を私たちのために罪となされた。それは、私たちをその方において神の正義とするためである」（コリント②5・21）と記していますが、真に、イエズスは「罪を御存じなかった」のでした。

イエズスは「私に罪があると確認できる人がいるか」（ヨハネ8・46）と仰せになりました。教会の信仰は次のように表わされています。「イエズスは罪のない状態で宿り、生まれ、死去された」と。フローレンス公会議では全聖伝との一致のうちにこれが宣言されました。（DS『カトリック教会公文書集』1347）「罪のない状態で宿り、生まれ、死去された」。まさに正義の人、聖なる人でした。

10 新約聖書、信仰宣言、第二バティカン公会議は、共に繰り返します。「イエズス・キリストは真に私たちの一人となられ、罪を除いてすべて私たちと同じになられた」（ヘブライ4・15参照）「第二のアダムであるキリストが、(…)人間を人間自身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかにする」（『現代世界憲章』22）のは、キリストが人間に似たものであらせられたからでした。

このように考えてみると、第二バティカン公会議が聖アンセルモの有名な論文「なぜ神が人間に？」の質問に答えを与えているように思われます。これは、ニケア・コンスタンティノープル信経で宣言するように「私たち人間のために、私たちの救いのために」真の人間となられた神の御子の秘義を探る英知の質問です。

キリストは「罪を全く御存じではなかった」ゆえに、人間を「完全に」示すことができました。罪は決して人間を豊かにしません。それどころか、人間を低め、小さくします。当然もつべき完全性を奪ってしまうのです。（『現代世界憲章』13参照）堕落した人間の救助、人間の救いこそ、御託身（受肉）の理由なのです。

不変の教え

苦しむ時も父なる神に信頼しなさい

世界中で多くの人々が、自分の力ではどうすることもできない種々の状況を目にして、不安にさいなまれています。差し迫った脅威、死期を迎えた病、将来への不安、安全と生命の危険などに苦しんでいるのです。

このような経験を免れているとしても、愛する兄弟の皆さん、信者として「苦しんでおられるキリスト」の心を共に分かち合い、過去の試練をキリストに捧げ、これから神が送られる苦しみを進んで受け入れる、と宣言しましょう。「背を向けるのはやめましょう」。

また、信仰の光を持たないがために、なぜ苦しむのかを知らない人々の苦しみをもキリストに捧げましょう。人々が苦しみの意味を理解できるように祈りましょう。同時に最善を尽くして苦しみを軽くし、できるならばなくすよう努力しましょう。

福音書は自らの最高の犠牲を前にしたイエズスの高まる不安について、簡単ですがはっきりと述べています。ユダヤ人の過越祭の五日前に、イエズスはその心が「騒いでいる」(ヨハネ12・27)と言われました。犠牲になる前の晩、オリーブ山の庭園で「私の魂は死なんばかりに悲しむ」(マテオ26・38、マルコ14・34)と言われました。キリストの高まりゆく内面の苦悩は、このような状況におかれた人間の自然の心理そのものであって、人間となられた神の子が私たちの苦しみと無関係でないことを理解させてくれます。キリストがどれほど切実に、またどの程度まで人間性を経験し、人間の弱さを体験されたかがわかるのです。

受難を前にした日々ほどイエズスが助けも慰めもなく、私たちと同じように人間として苦しまれた時はないでしょう。しかし、明らかに弱さの現われる日々においてこそ、苦難と失意の中で救いの御業を成し遂げられたのです。神の御子はその神性を放棄されたのではなく、ただ隠しておられ、死が勝利を収めるかに思えた時に命を生み出されたのです。

親愛なる兄弟の皆さん、試練をお送りになる御方に信頼しましょう。反抗せずに信頼しましょう。信頼することができるよう祈りましょう。苦しみを通して私たちに何を言おうとしておられるのか理解できるよう、キリストの恩寵を願いましょう。キリストは私たちに教えてくださいます。私たちを導き救ってくださるのです。これらのことを理解するのは本当に大切です。確かにこれは人間の理解力を越えたこと、人間心理の法則を越えたことがらです。しかし、人間の知恵を無にするのではありません。人知を越え、神の思いの「論理」を受け入れることによって、さらに人間の知恵を豊かにする、より優れた知恵なのです。

神が私たちを試練にあわされる時にも試練のなかに神の愛を見ることができれば幸せです。イエズスは何を教えておられるのでしょうか。試練の時にも常に神を信じる、これに尽きます。神が私たちに十字架をお送りになるのには理由があるのです。神は善なる御方ですから、十字架をお送りになるとすればそれは私たちにとって役に立つからです。これが信仰の教えなのです。そして受難を前にしてキリストが私たちにお教えになることなのです。

「主なる神が私を守られたので、私はののしりを感ぜず、顔を石のように固くした。こうして私は恥を受けなかった。私の義をあかすものは近い。」(イザヤ50・7～8)

預言者イザヤはこのように言っています。神の御旨を受け入れる覚悟ができていると述べているのです。十字架での死が近づいた時のキリストも同じ心の状態だったのです。これは信頼の態度です。普通なら「父よ、この時から私を救い給え」(ヨハネ12・27)と言うでしょう。

「だが私がこの時を迎えたのは、そのためなのである。」イエズスは「この時」から救ってほしいとは願われません。この時こそ父なる神に従い、常に望んでいた時、主の全生涯の意味が表わされる決定的な出来事なのですから。(三・三〇)

モラビアの保護者 マリア

霊的巡礼 ⑩

ヨーロッパのモラビアとコパトロンズの使徒であった聖チリロとメトジオを記念するにあたり、古くからキリスト教の伝統を誇るかの地に思いを馳せようと思います。

カルパート山脈の北西の端に位置するモラビアには美しい平原が広がり、ここにホストン山がそびえています。敵の侵入にあうと人々はこの山に避難したのでした。はるか昔には異教徒の祭礼が盛んに行なわれていましたが、聖チリロとメトジオ兄弟の努力によりモラビアの人々が福音を受け入れてからは、キリスト教信仰の地となりました。タタール人が群れをなして攻め入り、破壊と恐怖、死をもたらすようになると、人々はまたもやこの山に逃げこみました。一二四一年、ホストン山に避難していた人々は、聖母マリアに熱心な祈りを捧げ、慈悲と救いを求めました。するとタタール人は戦いに敗れこの地から去ったのです。人々は天からの特別な取り次ぎによるものと信じました。

以来、聖母マリアは勝利をもたらすモラビアの守護者としてホストン山で敬われています。

十六世紀中ごろには山に礼拝堂が建てられ、近くの鉱山の労働者たちが足しげく訪れました。しかし一世紀後には狂信者により壊されてしまいました。三十年戦争の後再建され、この時初めて幼な子イエズスを腕に抱いたマリア像が安置されたのです。

十八世紀には二つの塔をもつ美しい教会が建てられました。その隣りの司祭館には三人の司祭と二人の修士が住み、ますます多くなる巡礼者の助けとなりました。その後教会は閉鎖され祭壇も取り除かれました。この聖所で再び礼拝が行なわれるようになったのは一八四〇年になってからです。新しい祭壇が設けられ、聖母子の木像が安置されました。

信心が大変広まり、巡礼が行なわれるようになったのは最近になってからのことです。(…)私自ら、ホストンの聖所を小バシリカの位に昇格させました。

この地方一帯には他にも聖母マリアに捧げられた聖所があり、古く聖メトジオの教座のあったベレラドの聖所もその一つで、ここではすべてのキリスト者の一致の聖母が崇敬されています。

私にとっては、非常に懐しい所ばかりです。これらの聖所で敬われている聖母に祈りましょう。

(八八・二・十四)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円
■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393